

2013年度春季人権週間プログラム講演および映画上映会

日時：2013年6月25日（火） 18：20～20：40

会場：立教大学 新座キャンパス N313 教室

『ハンナのかばん —アウシュヴィッツに消えた13歳の少女—』

講師 石岡 史子 氏（NPO 法人ホロコースト教育資料センター代表）

講師 石岡氏による上映前の解説

今日は、『ハンナのかばん』という1つのかばんをテーマに皆さんと人権を考えてみたいと思います。「人権」という言葉は固いですが、私たちは小学校から中学、高校まで授業などで取り上げ、大学生も今日このような機会がありますが、人権とはどういうことでしょうか。一人一人の生活の中でどのように気をつけていくべきものなのか、つかみにくいイメージがあると思います。ある研修会では、「人権は人と人とのコミュニケーションのあり方だ」とおっしゃった先生もいました。自分を大事にするのと同じように、人の気持ちを想像し、尊重し、大事にするという関係を築いていけたらいいと思います。

今日はこのかばんが私たちに伝えてくれるメッセージからお一人お一人が何かをつかんでいただけたらと思います。写真で出しているこのハンナのかばんがすべての始まりでした。2000年の春に私たちNPOのもとに届きました。

今日、実物を持って来られたらよかったです。天候が危なかったので持って来られません。このかばんですが、もうご存じの方も、今日初めて見ていただく方も、どう思うでしょうか。「これは何だろう」と、何か思い浮かぶ言葉などはありませんか。何のインフォメーションもお伝えしないまま、このかばんの写真を見て、皆さんはどんな想像を膨らませますか。人権の1つのキーワードと思うのは、自分が会おう人や、自分が目にするもの、そこにどれだけ想像力を膨らませることができるか。それが人権を大事にする社会をつくっていきこうという1つのキーワードのような気がします。

このかばんは、ポーランドのアウシュヴィッツ収容所跡に作られた博物館から借りました。第二次世界大戦時、ヨーロッパで起きていたユダヤ人迫害、虐殺。当時、ナチスはヨーロッパ全土に収容所を作ったわけですが、その中でも最大規模の収容所がアウシュヴィッツです。ここから届いた

かばんです。このアウシュヴィッツ1カ所で100万人から110万人の命が奪われたと言われていますが、ここは現在、世界遺産です。人類の負の遺産、博物館施設として残っているこの場所を写真でご覧になった方や、直接お出かけになった方もいるかもしれません。この場所に実はこんなにたくさんのかばんが山のように積んであります。持ち主はもういない。多くの人たちが、このような旅行かばんを持ってアウシュヴィッツに連れて来られて、そして亡くなりました。持ち主はいないけれども、残されたかばんがこの悲劇を物語っているわけです。現在もアウシュヴィッツに行くと4,000個近いかばんが残っているのを見ることができます。その中から1つ、このハンナのかばんが2000年の春、私たちのもとにやって来ました。

【ハンナのかばんが届いた！】

そもそもなぜ日本にやって来たかという、私たちはホロコーストという歴史を教材にして命や人権を大事にする世界を作っていこう、そのようなことを子どもたちと学びたいと考えて、ホロコースト教育資料センターを作りました。この歴史を伝えるいろいろな白黒の写真などを集めました。当時、600万人の命が奪われ、その中には、150万人の子どももいました。その歴史を伝える写真などを飾って、東京の新宿区に小さな資料室を開いていました。でも、白黒の写真だと、今を生きている私たち、特に子どもたちから見ると距離があります。歴史から学ぼうと言っても、実感を持って、この出来事が本当にあったということを伝えるに、ここで、何か形のあるものを借りようと思って、何でもいいから当時の資料を貸してくれませんかアウシュヴィッツ博物館に頼んだところ、さっきの山積みの4,000個近いかばんの中から、このかばんが1つ、偶然に私たちの資料センターに届きました。振り返ってみると、私にとってはこのかばんが届いたのが一番の奇跡です。ほかのどのかばんが届いても不思議ではな

かったのに、あの4,000個の中からこの1つのかばんと出会いました。

正直言うと、このかばんが届いたとき、私は途方に暮れてしまいました。最初は、こんな貴重なものを借りることができたと思って興奮しましたが、でも、これは別に何てことのない、昔の古いトランクという感じです。60センチぐらいの幅で、結構大きさはあります。でも、この1つのかばんを使って、一体どうやってこの600万人もの虐殺の出来事を伝えたらいいのか、正直どうしようと思いました。すると、当時、開設していた小さな資料館に小学生、中学生、高校生たちが見学に来てくれました。「ああ、でっかいかばんだな。何これ」と、かばんを取り囲んで見学してくれました。「ハンナって名前が書いてあるけど、これ誰?」、「1931って何?」。かばんには、誕生日が書いてあります。1931年5月16日、「V」というのがローマ数字の5です。それから、Waisenkind（ヴァイゼンキント）、これはドイツ語で孤児。「ハンナって誰?」、「5月16日生まれ、あっ、お兄ちゃんと同じ誕生日だ」という小学生もいました。それから、ある高校生はこの「孤児」という言葉を見て、「なぜ孤児って書いてあるの?」と聞いてきました。でも、私はそのときは分かりませんでした。「たぶん両親が殺されてしまってハンナが一人ぼっちだったのかな」と適当に答えてしまいました。そうすると、その高校生が怒り出して、「ナチスは最初に両親の命を奪って、そして一人残った子どものハンナを孤児なんて呼ぶのはひどい」と言いました。子どもたちはこのようにいろいろと想像を膨らませてくれました。小さい子は取っ手のところを見て、「ここにハンナの指紋が付いているのかな」、また「中に何が入っていたのかな、ハンナは一体どんな子だったのかな」、「600万人が殺されたと言われてもピンと来ないけれども、その中の1人、私たちの目の前にあるこのかばんを持っていた女の子も生きていたんだね。その600万人の中の1人だったんだね」などと、こ



の子どもたちと一緒に想像しました。

【命が伝わるかばんにしたい！ 調査の開始】

それで、私はハッと気づかされたんです。このかばんをこうやって置いてあったら、「ああ、この子死んじゃったんだね。かわいそう」。それは分かるけれども、でも、この子も確かに生きていたんだ。もう少し温かい命が伝わるようなかばんにしたいなと思いました。だから、調査をしてみようと思いました。手がかりは、このかばん1つ。分かっていることは、名前と、誕生日と、孤児、これだけです。ハンナの写真、どこかに残っていないかなと思いました。顔が分かれば、もう少しこの失われた1つの命に思いを馳せることができるのではないかなと。でも、私は歴史家でもありませんし、調査はしたこともありませんでした。どこからどうやって調べよう。皆さんだったらどうしますか。60年前の出来事で、600万人の奪われた命、その中の1つの命。日本から遠く離れたヨーロッパのことを調べたいわけです。どうしよう。皆さんだったら、どうしますか。最近、中学校や高校に行くと、「Google、Google!」と言われますが、「ハンナ・ブレイディ」と検索しても、当時は何も出てきませんでした。ところが、調査を始めたら、1年もたたないうちにいろいろなことが分かりました。

その経緯は、映画の中でじっくりご覧いただきたいと思います。この映画は、様々な登場人物が



出てきます。時代は1930年代から現代まで、地理的には現代の日本からヨーロッパ、カナダが出てきます。最初にネタバレらしをしてしまいます。このかばんですが、持ち主のハンナは13歳でアウシュヴィッツのガス室に送られて殺されました。ところが、ハンナには3歳年上のお兄ちゃんがいたということ。そして、そのお兄ちゃんはあの虐殺を奇跡的に16歳で生き延びたということも分かりました。また偶然も重なって、ジョージ・ブレイディさんというハンナのお兄ちゃんは、今、カナダで暮らしていることも分かりました。ハンナのお兄ちゃんへ子どもたちと一緒に手紙を書いてみようということになりました。「あなたの妹の名前が書いてあるかばんが、いま東京にあります。妹さんのことを教えてくださいませんか。」という内容の手紙を送りました。するとお兄ちゃんからすぐに返事が届きました。4ページもの長い手紙です。妹との思い出がいっぱい書きつづってありました。この手紙の中にはハンナの写真も同封されていました。あのかばんの上に白いペンキで書かれたハンナという名前と、このかわいらしい丸顔の女の子の写真が初めて重なりました。

この瞬間までは、私もハンナのことで頭がいっぱいで、このかばんの持ち主のハンナはどんな子だったのだろう。ハンナ、ハンナと頭がハンナのことでいっぱいでしたが、この写真を見た途端、

ハンナのことは頭の隅っこに行ってしまうと、別の人のことを考えていました。こんなにかわいらしい妹を失ったお兄ちゃんは、今までどんなにつらい思いを抱えてきたか、そのようなことを想像しました。でも、お兄さんが初めて送ってくれた手紙を最後まで読んでみると、こんなことが書いてありました。「妹のかばんが日本にあるって本当ですか。それに皆さん、僕の妹のことを調べてくれたのですか。では、いつか皆さんに会いに日本に行きたいな。」そして、ジョージさんは本当にはるばる遠い日本まで来てくれました。このかばんの前に立ったときに、お兄さんの目は涙で真っ赤でした。両親も幼い妹も、家族みんな、すべてを失ったお兄さんでした。特に何が伝わったかということ、自分よりも小さかった妹を守れなかったこと。60年以上たった今も、ジョージさんの悲しみはとてつもなく大きなものでした。大切な人を失う悲しみは消えないんだと、子どもたちの胸にも迫ってきました。

でも、ジョージさんとの出会いは、悲しみだけではなくて、私たちにたくさん希望ももたらしてくれました。その希望のメッセージも是非これからご覧いただく映画の中で感じとっていただけるのではないかと思います。

先に簡単にあらすじをご説明してしまいましたが、今日の映画は、半分ドキュメンタリーで半分は再現ドラマです。お兄さんのジョージ・ブレイディさんも登場します。平和について学びたい、友だちといろいろなことを話したいと「小さなつばさ」というグループをつくっていた子どもたちも実際に登場します。撮影時には少し大きくなっていましたので、ボランティアの小学生たちが代わりに登場してくれました。現代の東京とカナダが大きな2つの舞台です。ハンナの物語を伝えるために、1930年代のヨーロッパも登場します。それはチェコのかわいらしい俳優さんたちが、再現ドラマで演じています。

構想の段階も含めて、4年間かけてヨーロッパ、

カナダ、そして日本でも撮影を行いました。実際は90分のドキュメンタリー映画ですが、今日は1時間の短縮バージョンをご覧ください。映画が終わった後、この映画の中では描かれていないかばんから生まれたもう1つのびっくりするような出来事も後日談としてご紹介したいと思います。

(映画「ハンナのかばん」上映)

講師 石岡氏による映画上映後の解説および質疑応答

この映画について少しご紹介させてください。本編を通してバックに流れていた音楽は、当時収容所に捕らえられていた音楽家たちが作詞作曲したものです。ハンナとジョージが一番最初に捕まった収容所は、チェコ国内のテレジン収容所です。映画の中でも出てきましたが、ナチスの目を盗んでユダヤ人たちが秘密の芸術活動を行っていました。大人たちは、明日アウシュヴィッツに送られてしまうかもしれない。そのような死に直面しながら、最後まで子どもたちに学ぶ機会を与え続けていた。秘密の学校を開いて、子どもたちに勉強を教えていた。その中で、コンサートが開かれたり、子どもたちがオペラを上演したりということもありました。なぜそれが可能だったかというと、ナチス側もこのテレジン収容所を宣伝のために利用していたからです。当時のヨーロッパでは、ナチスドイツがユダヤ人に対してひどい虐殺をしているらしいという噂が流れ始めていましたが、このテレジン収容所だけは、一見、ユダヤ人たちが普通に生活しているという様子を作って、赤十字の視察を迎え入れて、「ユダヤ人はここで自給自足の生活をしているのではないか、何の問題もない」と、プロパガンダの目的で利用していた収容所でもありました。実際に学ぶことは禁じられていました。ナチスを告発する絵などを描いた画家は、実際処刑されています。ただ、子どもたちの秘密の学校などは、ナチス側が見て見ぬふ

りをしていたこともありました。なぜコンサートやオペラを上演できたのかというと、赤十字の視察がくるときに、その視察の人たちに向けてコンサートを開いて、ナチスは見せかけの芸術活動をさせたのです。ですから、この収容所の中ではひどい状況下でも非常に豊かな芸術活動が行われていました。バックミュージックは、ほとんどすべて収容所の中でつくられた音楽です。しかし、作曲家たちのほとんどがこの後アウシュヴィッツなどで殺されています。

映画監督のラリー・ワインシュタインさんはカナダのユダヤ系の方で、音楽が専門でモーツァルトやベートーヴェンなど音楽家をテーマにした映画を数多く作っています。この映画を作るときも当時失われた才能豊かな音楽家たちの作品を使おうということになりました。

それから、このラリー・ワインシュタインと一緒にもう長く映画を制作してきたチームの1人ですが、ご覧いただいた映画を撮影したカメラマンはドイツの方です。ホルスト・ザイドナーさんといって、実はお父さんがナチ党員で、当時、建築家だったとのこと。「ナチスを最後の最後まで、亡くなる直前まで正しかったと私の父は言っていました」と、撮影のときに話をしてくれました。ホルストさんは、お父さんが死の床についていたそのときにも、「あなたは間違っていた。それを認めるべきだ」と向き合ったそうです。でも、「残念だが、そんなことを言うならおまえを勘当すると言われてしまったんだ」と話していました。そんな家族の歴史を持っているドイツの方が、「自分はこの映画の話が来たときにぜひ関わりたいと思った」ということで参加してくれました。この映画は本当にスタッフに恵まれて制作された作品です。

ところどころナレーター役としていろいろな肌の子の子どもたちが登場したと思いますが、この映画が完成したのが2009年で、児童書『ハンナのかばん』はすでに2002年に出版され、世界中

の子どもたちが読んでくれました。この物語を題材にいろいろな学習活動が展開されていました。監督と映画を作ろうというアイデアが出たときに、これだけ詳しく子どもたちがハンナのお話を知っているわけだから、この子どもたちに登場してもらって、物語のストーリーテラーになってもらおうということになりました。本当にこの子どもたちはかわいくて、ジョージさんのもとに、今でも多くの手紙やメールが届いていますが、私の中でも一番好きな手紙が、「ジョージ・ブレイディさんへ。『ハンナのかばん』を読みました。あなたの妹についての本です。知っていますか。もしご存じなければ、私があらすじを教えてあげます」と言って、その手紙に「『ハンナのかばん』とは」というあらすじを書いてきた子どもがいるそうです。かわいいなと思います。監督と一緒にそのような子どもたちの手紙を見てきましたので、子どもたちに物語の語り手になってもらおうということで、映画に登場してもらっています。

【ホロコーストの事実と向き合う】

少し映画制作の補足をさせていただきました。このままこの映画の余韻を持って帰っていただきたいところですが、今日は人権セミナーということでもあるので、1つだけ皆さんと一緒に考えてみたいことがあります。今、1つの作品を見ていろいろな思いを持っていただいていると思いますが、「なぜ」と思いませんか。忘れてならないのは、ナチスドイツが台頭した1933年から1945年まで、途中で戦争が始まるわけですが、12年間続いた迫害と考えると、どうでしょうか。12年間、1つのグループの人たちを迫害し、この社会から追放し最後は虐殺してしまったという事実です。今年はナチス率いるヒトラーが政権を握ってちょうど80年です。1933年1月30日、それまで国会では少数派だったナチ党が選挙を重ねるごとに議席数を伸ばして、その党の党首ということでヒトラーは政権を握ります。

ドイツでは、ナチス政権獲得80年という節目に、ホロコーストの歴史を忘れない、二度と繰り返さないように、歴史を学ぶための講演会、映画上映会、史跡ツアーや朗読会など140を超えるさまざまな教育事業が全土で展開されています。今年いっぱい続くそうです。特にベルリンは一番注目されているので、日本でも新聞記事になりました。ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。1月30日、ナチスの政権獲得80年の節目にオープンしたベルリンの展示会でメルケル首相が、「ヒトラーが政権を獲得することができたのは、一部のエリートのみではない。黙っていた大部分の市民にも責任がある」と演説しました。ドイツの指導者のスピーチでは、ヴァイツゼッカー大統領の「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります(岩波ブックレット No767「新版 荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説—」永井清彦訳より)」という有名なスピーチがあります。このメルケル首相の、「市民が黙っていたこと」に触れたスピーチは他にあったでしょうか。とても印象的だと思いました。

ベルギーでは、ブリュッセルから電車で北に20分ほど行ったメヘレンという市に、ユダヤ人を一時収容しておくための場所がありました。戦後68年経ちました。昨年、新しい歴史博物館、ホロコーストの博物館がここにオープンしました。なぜベルギーか。ベルギーも当時ナチスに占領されて、ユダヤ人を捕まえてアウシュヴィッツに送っていた。送ったのはナチスかもしれない。でも、当時のベルギー側もナチスに協力していた。そのことを大統領はじめベルギーの政治家たちも演説などで言及し、このメヘレンに新しい歴史博物館を作りました。入口には、サッカー場で熱狂する市民のワーツという、ものすごい集団が熱狂しているカラーの写真が展示されているそうです。こんな文字が書いてあるそうです。「集団の渦はあなたを興奮させ、燃え上がらせ、沸き立たせる。あな

た自身の感覚は消え失せる」と。それを見た後で、60 数年前のホロコーストの歴史をたどっていきま

す。最近、東京の大久保のいわゆるコリアンタウンでヘイトスピーチが繰り返行われていることにも本当に危機感を覚えます。この間、ある自治体での研修会で、74 歳の男性の方がこんな発言をしました。「差別、偏見がだめっていうのは分かっているけど、黙っていたらやられちゃうよ。無気力、無関心より、ちょっとぐらい威勢がいいほうがいい」と。この発言は、今の日本の一部の本音なのかなと思います。

今、私たちの足元で、こんなに身近なところで、ある 1 つのグループの人々を、国籍、宗教または民族、などでくくって、憎しみから出る言葉をぶつけている状況がある。これに私たちはどう向き合っていくらいいのでしょうか。ヨーロッパでは、今の私たちのあり方、私たちはどういう社会にしていくなのか、常に過去を振り返りながら、ホロコーストのときはこうだったと、学びを何度も何度も繰り返しています。一度知ったからこれでいいということではない。人間はどうしても楽なほうに流れていってしまう弱さがある。「何だか分からないけれども、最近不況で不安だよね。もう自分のことで精いっぱい」というときに、自分で考えることをやめてしまって、つい流れに乗ってしまう。そういうことに常に注意を払っていないといけないのではないかと感じます。

【なぜユダヤ人はターゲットになったのか】

当時、憎しみのターゲットになぜユダヤ人になってしまったのか。実は、それも矛盾だけです。当時の、「不景気だ、本当に生活が苦しい、仕事も見つからない。政治も不安だし経済もよくならないしこれからどうする」という空気が世界中に蔓延していたときに、「悪いのはあっちだ!」とユダヤ人を指さすわけです。「あなたたち国民は悪くない」とヒトラーがこぶしを振上げて演

説する映像をよく見ますが、本当にうまかったと言います。国民の心を魅了する演説。「あいつらユダヤ人は金持ちで、自分たちだけいい暮らしをしていて、もうなんて憎たらしいんだ、あいつらが悪い」と憎しみをあおり立てると同時に、ヒトラーが演説をする中でも特に国民の心をとらえた言葉。それは、「私たちは優秀だ。あなたたちは優秀だ。私たちは悪くない」。その言葉は、とにかく不安でいっぱいだった人たちの耳に聞こえがよかったです。だから、「ユダヤ人が悪いって、よく分からないけれども、そうだ。そうだ。あっちが悪い」と流されてしまう。

でも、なぜユダヤ人がターゲットになってしまったのか。そこを見たいと思います。なぜかという、ユダヤ人に対する憎しみは、そもそも矛盾をはらんでいて何かいいかげんな、根拠のない憎しみです。「ユダヤ人」だから殺された、という表現は、ホロコーストの歴史を学ぶときは素通りしがちなところだと思いますが、そこに注目したいと思います。当時、すべての「悪の根源」だと言われたユダヤ人が、当時ドイツに何%ぐらい暮らしていたと思いますか。中学生に聞くと、60%、70%など、結構多数派になります。皆さんに聞いてみてもいいですか。10%ぐらいと思う人、パーを挙げてください。1%ぐらいという人、ゲを挙げてください。全員お願いします、どうぞ。10%、1%。半分ずつぐらいに分かれましたね、ありがとうございます。正解は1%です。正確には0.75%。これはどういうことですか。ごく少数です。この国の政治も経済もうまくいかない、彼らがそのすべての原因だと言われたわけです。お金持ちのユダヤ人というイメージがあるかもしれませんが、それはナチスが巧みに作り上げたイメージです。

では、それだけの少数派がなぜターゲットになったのか。そして、そもそも「ユダヤ人」だから殺された、「ユダヤ人だから」差別されたと言

と思います。なぜ差別されたのでしょうか。今日は時間も限られているので、これも簡単なクイズにしてみました。どうしてユダヤ人は差別されたのか。宗教が違うからだと思う方、パーを挙げてください。いやいや、「ユダヤ人」だから人種でしょう。これはナチスによる人種差別でしょうと思う方はグーを挙げてください。もう1回、全員お願いします。どうでしょうか。これも分かれましたね。ありがとうございます。これはちょっと引っかけ問題で、両方正解です。でも待ってください。ユダヤ人と言うけれども人種ではありません。ユダヤ教を信じる人々がユダヤ人です。本人は信じていなくても、ユダヤ教を信じる両親、祖父母がいた、またはその子孫も該当します。人種ではないということは、宗教でしょうか。昔から、ヒトラー登場の前から、ヨーロッパでは2000年という長い間、ユダヤ人に対する憎しみがありました。キリスト教社会の中の少数派の異教徒ということで、しばしば憎まれることがありました。イエス・キリストは神の子、それを信じないユダヤ人はなんて傲慢なのだ。キリスト教こそ一番という時代であって、異教徒であることで、「おまえは非国民だ」と差別された時代でした。そのような時代にヨーロッパの東のポーランドで暮らしていたユダヤ人がいます。(パワーポイントの写真を指して)左の男性は敬虔なユダヤ教徒かなという感じがうかがえますね。フランスでも長く暮らしていたユダヤ人はいます。どうでしょうか。この人たちは、私たちから見て、区別はつかないですね。キリスト教社会に溶け込んで暮らしていたユダヤ人もいたり、また少し裕福な感じに見えます。一方ではつつましく暮らしていたユダヤ人たちもいて、いろいろな人々がいたわけですが、昔からヨーロッパに根付いていた異教徒という、宗教が違うことからくる差別。それは根強いものがあつたといわれます。でも、宗教が違ったからユダヤ人は差別されたのか。実際にナチスは「ユダヤ人は劣等人種だ」と言っているわけです。これはどうい

うことだと思いますか。(パワーポイント資料を指して)当時、子どもたちが学校で読んでいた教科書の副教材のように使われていた絵本の1ページですが、左側が「優秀なドイツ人」。金髪で青い目で、体格もがっしりして、我々は優秀だ。右側がユダヤ人。先ほど皆さんに見ていただいた映画の中に出てきたユダヤ人とは似ても似つかないと思いますが、ナチスはまじめな顔でこういう絵本を作って子どもたちに読ませていました。明らかにこのイラストで描かれているのは、宗教の違いではないです。見た目で、身体的特徴で人間を分けようとしています。それで、ナチスは一生懸命、これを証明しようとしています。これは何だと思えますか。左のほうに髪の毛の色のサンプルがあります。このような器具類を使って、人間の目の色、鼻の大きさ、頭蓋骨の大きさなどを測って、身体的特徴によってドイツ国家に必要な人々、そうでない人々、劣等人種と分けていこうとしたわけです。これは何の科学的根拠もない、インチキな検査です。白衣を着た科学者や看護師がまじめくさった顔で検査をして、人間を分けようとするわけです。でも、何も証明しないわけです。では、どうしたと思えますか。ユダヤ人は劣等人種、ユダヤ人はこの社会に必要なないと、次々と追放していくわけですが、人種ではないから、金髪の人もいれば、黒髪の人もいて、肌の色では区別がつかない。こんな検査をしても何も証明できない。では、どうやって区別したのでしょうか。国勢調査を行いました。一人一人の個人情報を集めました。そのときに宗教を問う項目が初めて追加されました。当時の最先端のコンピューターでIBMと中に書いてあります。コンピューターで一人一人の個人情報=住所、家族構成、職業、そして宗教を問う項目が設けられて情報が集められて役所に登録される。家族の中で父方、母方のおじいちゃん、おばあちゃんの4人を調べて、そのうちの3人がユダヤ教徒であれば、あなたが今何を信じていようと、「はい、あなたもユダヤ人」と登録されて

しまう。ユダヤ人ではないふりをして、隠れたり逃げたりすることはできなかったのかと、子どもたちから聞かれますが、一人一人の情報が集められて、市役所などに登録されていたわけですから難しかったのでしょう。

【人間が持っている弱さに気づき、更にどう行動するのか】

ここで皆さんと考えてみたかったことですが、ナチス側はこの不景気で、政治も不安定で、悪の根源ユダヤ人を追放せよとは言ったものの、そもそもユダヤ人って誰だと、その線引きがナチス側も非常にあいまいでした。「宗教」であるはずなのに「人種」に仕立てあげ、我々よりも劣っているということを「人種検査」で証明しようとした。でも、結局「ユダヤ人」かどうかの根拠は国勢調査で調べた宗教の項目です。この差別の矛盾。これが1つのポイントではないかなと思います。(パワーポイント資料を指して)登録された人たちは、こんな星のマークを付けられて、見てすぐに分かるようにするわけです。これだけ矛盾に満ちた差別に対して、一般の人々も、「そうだそうだ、あっちが悪い」と流されてしまった。

ドイツを含め、ドイツ以外のヨーロッパの国々でも、とにかく繰り返し繰り返しこの歴史を学んでいます。人間というのは弱いものだという認識のもと、まずそこに向き合って、ではどうしたらその弱さは乗り越えられるのか。私たちはどういう社会に生きたいのか。差別的な発言を許すような社会に生きたいのか。ホロコーストもじわりじわりと少しずつ迫害が進んでいきました。ある人は、それを毒薬にたとえて、「そんなに強烈ではない毒薬を毎日少しずつ与えられて、気がついたらもう体中が毒に侵されていた。ホロコーストはまるでそんな感じだった」と述べています。私たちも今、おかしいと思ったら、それをまわりの人と話してみるなど、今始めてなくてはいけないことがあるのではないかと思います。

ホロコースト、虐殺の悲惨さは、皆さんも映像などで見たことがあると思います。アウシュヴィッツ、ひどいよねと。けれども、これを人間の狂気、悪魔、そのようなことで片づけてしまったら意味がないと思います。今日の会は決してドイツを批判することが目的ではありません。同じ人間として、差別や偏見など、どうしても人間が持っている弱さに向き合うこと、それに気づいて、では、向き合ったときにどうしていこうか。そこを考えていくのが大事ではないかと思います。

【勇気をもって行動した人々】

この歴史から学べることは、もう1つ、必ず子どもたちとも話をしているのですが、そのような状況の中でも、勇気を出して行動した人もいたということです。ドイツ人の中でもユダヤ人を助けた市民がいました。440人ぐらいでしたか。今でも新たな証言によって、その数は増え続けています。映画『シンドラーのリスト』を見たことがある方はいらっしゃるでしょうか。(パワーポイントの資料を指して)オスカー・シンドラー、一番左側の男性は、日本でもよく知られている男性です。自ら経営する工場にユダヤ人を労働者として雇って保護した人です。真ん中の女性は女学校の先生です。学校に行けなくなったユダヤ人の子どもたちを、そっと自宅に招いて勉強を教えてあげます。この右の男性は目の不自由な方でほうき職人です。ベルリンにほうき工場がありました。今も記念館として残っているので、ヨーロッパに行くチャンスがあったときは是非訪ねてください。ベルリンのど真ん中にある小さなほうき工場、奥のほうの壁に穴を開けてユダヤ人をかくまうんです。ですが、このほうき工場は見つかってしまって、収容所に送られてしまった人たちもいました。下の男性はヒトラーに対して手紙を書いた作家です。「これは差別だ、あなたは間違っている」と訴えた。この人たちは一人一人、自分が置かれている立場で何ができるだろうと考えて、勇気を

持って行動した人たちでした。

【杉原千畝さんと善の連鎖】

この人は知っていますか。杉原千畝。リトアニア、バルト海に面する小国ですが、そこに日本人外交官として赴任していた杉原さんの元へ、ある日大量の難民がやって来て、助けてくれと言うわけです。日本を通して安全な国に逃げられるように、日本通過の許可証をくださいと言います。杉原さんは外務省に電報を打ちますが、行き先も分からない、所持金も十分でない難民に許可証を出してはならないとの回答でした。でも、目の前に難民が迫っている。この人たちを見捨てるわけにはいかないと、自分の頭で考えて決断して行動した外交官です。皆さん、ここでまた想像力を膨らませてみてください。杉原千畝さんがユダヤ難民にヨーロッパ脱出のチャンスとなる日本通過の許可証、ビザを出したということは、どういうことでしょうか。そのビザを持って日本まで逃げてきていた難民があの時代にいたということです。当時、ヨーロッパから極東までシベリア鉄道で9,000キロ。どれくらい日数がかかったのでしょうか。10日間ぐらいかかりました。逃げて、逃げて、逃げて、逃げて、ウラジオストクの港に着いたら船に乗り換えて、荒波の日本海を当時は3日間ぐらいかかったそうです。そして、何県に上陸したと思いますか。福井県の敦賀に、ヒトラーから逃げてきていた難民たちがたどり着いています。敦賀の人はどうしたと思いますか。敦賀も空襲で資料がなくなっていますが、敦賀市役所の古江孝治さんという方が、今、記録をとっておかなければ手遅れになるということで、敦賀市民に調査をしました。すると、あの当時、着の身着のままみすぼらしい格好で逃げてきた難民の人たちが船から降りてきた様子を見たよという市民の証言が幾つも集まって、その中には、敦賀駅の近くだったと思いますが、長旅でつらかったのだろう。何かの危険から逃げてきたらしい。今日は一日、銭湯を無料

にするから入っていけとって入れてあげたおじちゃんがいるそうです。ある時計店のお嬢さんは、当時中学生ぐらいで、ユダヤ人が腕時計を持ってきたそうです。お父さんは時計屋のご主人ですが、言葉は通じない。難民らしい人が、時計をこうやって、ジェスチャーで食べるまねをしたそうです。この時計を買ってほしい、この時計をお金で換えて、食べるものを買いたいということですね。それを覚えている時計店のお嬢さんが敦賀にいらして、あのおとき難民の人が時計を売りにうちに来たと証言しています。敦賀に上陸して、そして、神戸に難民としてしばらく滞在していました。ところが、日本にやって来たのは通過許可証ですから、3週間、4週間も日本にいられないわけです。でも、命からがら逃げてきた難民たちは、日本にいて次はどこに逃げていこうか、その行き先も分からない人たちです。すると、宗教学者の小辻節三という人、その人はユダヤ教にも非常に詳しい方だったので、ユダヤ人の置かれた立場をよく分かっていて、外務省に直接働きかけて滞在許可を延長してあげようと訴えた。そんな方もいらしたそうです。また、神戸のある教会では、牧師さんたちが木箱にリンゴやミカンをいっぱい詰めて、難民たちに手渡してあげました。当時、リンゴは貴重なものでしたが、それを何とか集めてきて、難民たちに渡してあげたということです。こうしてみると、杉原千畝さんは、外務省の訓令に反してビザを発給した。でも、この杉原さんの勇氣ある行動だけでは難民たちは助からなかった。その後、長い逃避行が待っていたからです。よくみると、その逃避行の途中で小さいことかもしれないですが、救いの手を差し伸べた人たちがいたからこそ、この難民たちは逃げ延びることができた。これが今、『善の連鎖』と言われています。人間のその善の部分信じたいですね。今を生きている私たちの周りからも広げていくことができないものか、そんなことを考えています。

私には話したいことがありすぎて止まりません

が、せっかくなので皆さんから質問や感想などを伺いたいと思います。映画に戻ってもいいですし、ジョージさんのことでも、何でもいいです。

<質疑応答>

○質問1 貴重なお話をありがとうございます。私が今日講演会に参加したのは、ユダヤ人について授業で扱っていて、興味を持っていたというのが大きいのですが、アウシュヴィッツの話聞いて、アウシュヴィッツが怖いというのは知っていましたが、その視点からではなくて、ハンナという子どもが生きていたことを皆で考えるという視点で、そのお兄さんも喜んでいたということで、自分も大事にしている人を考えてあげたいなと思いました。

○石岡氏 今日一番初めて見ていただいたこのかばんも、とにかくこれがすべての始まりでした。別になんていうこともないかばんですが、1時間の映画の中で見ていただいた全てがこの中に詰まっています。この1つのかばんから、皆さんが映画で観ていただいたことと同じように、もう一人別の子のかばんをもし見ることがあったときに、その子のかばんの中にも、ハンナと同じような人生が詰まっていたのかなと想像できると思います。ホロコースト以後も、残念ながら、カンボジアやルワンダ、そして現在でもシリアで続いている争いの中で失われていく小さい命というのがあります。そういうところにも思いを馳せてみたり、あるいは、本当に自分のすぐそばにいる大事な人のことに思いを馳せてみたり、想像してみるということ、そういう時間を少し立ち止まって持ってみるというのは、すごく大事ではないかなと思います。ありがとうございます。

○質問2 ジョージさんはどのようにして生き延びたのか。そして、どういう過程でカナダに渡ったのか、その事実を知りたいと思います。

○石岡氏 それは質問していただきたかったこと

です。当時、ジョージさんは16歳でしたが、その男の子がどうやってアウシュヴィッツを生き延びたのか、お話ししたいと思います。アウシュヴィッツでは、飢えと寒さと朝から晩までの労働と、夜も体を休められない。「そういうものが一度に襲ってくると、人間は3カ月、4カ月も命がもつもんじゃないよ」と言われる生還者の方もいらっしゃいますが、ジョージさんは1944年9月末から10月、11月、12月、そして1月、実は最後の最後に脱走しています。脱走という言葉では軽く聞こえますが、この4カ月を本当にぎりぎり持ちこたえました。16歳の男の子がどうやって生き延びたのか。

アウシュヴィッツに着くと命の選別とって、働けるか、働けないかで分けられます。15歳以下の子どもたちはほとんどの場合はガス室送りですが、ジョージは16歳。丸坊主に剃られて、腕に番号を入れ墨されて、みんなしましまの囚人服を着せられます。そうすると、16歳の男の子も12歳ぐらいに幼く見えてしまう。いったんこの命の選別をくぐり抜けて、「おまえはじゃあ労働だ」と言われて工場に送られる。ところが、朝から晩までの奴隷労働の毎日、粗末な食事で、体が弱って倒ればそこでまた命の選別が行われます。働けるか、働けないか。そのように仲間が倒れては撃ち殺され、またはガス室とうわさされる、どこかへ送られて帰ってこない。鼻をつく(死体を焼却する)においがアウシュヴィッツ中に広がっていたといわれます。その中で16歳の男の子は何を考えていたのかなと思います。ジョージは、「俺は人間だ。それを忘れたくなかった」と言います。そのために16歳の男の子がある小さな抵抗をしました。食事のとき、器に水のような濁ったスープがほんの1杯、茶色い色がついているだけです。中ではみんな「コーヒー」なんて呼んでいました。ラッキーだったら具が入っているときもあった。具といっても小さなカブのかけらか何か、そんなものです。そのときにジョージは、そのまま

器に口をつけて動物のようになめるようにスープを飲むのではなく、落ちていた小枝を拾ってきて、爪楊枝みたいにしてカブを突き刺して口に運ぶ。それをすることで、どんなに意味のない暴力、殴られて、蹴られてという毎日でも、「俺は人間だ。それを忘れたくない。忘れてしまえば、もうだめだ、生きる気力を失ってしまう」と、16歳の男の子はそう思ったそうです。あるときはパンがひとかけら配られます。ジョージは、このひとかけらが、どうしたら何日もつかと考えます。手作りのナイフを作ります。落ちていた鉄の破片を拾ってきて、研いで、針金を曲げてとってにして、このひとかけらのパンを毎日ちょっとずつスライスします。そうすると、ひとかけらのパンだけど、これが何日もつかもつ。

ところが、このナイフをポケットに忍ばせていたら、ある日、「おまえら、危険なものは持っていないか。一列に並べ」と、暴動が起きたりしないように身体検査をします。次、自分の番になったとき、ジョージはさすがに怖くて震えてきて、ポケットのナイフが見つかったら命はない、どうしようと。そのときに、誰かがボンとスプーンを投げました。コンクリートの床にカタンと音を立てて、ジョージの前でそのスプーンが落ちました。身体検査をしていた看守は、ジョージが落としたスプーンだと思って、「何だ、おまえ。スプーンなんか落として」と、首根っこを捕まえて列からぐいと引っ張り出して、ほこほこに殴ります。ジョージはそのときのせいで片耳が聞こえませんが、でも、ポケットのナイフは見つからなかった。「見つかっていれば、僕は今、ここにいないよ」と語っています。

ジョージがアウシュヴィッツ収容所で特につらかったことは、仲間が殴られているのを見て、「あ、自分じゃなくてよかった」と思ってしまった瞬間が1回あったそうです。そのときに、「ああ、俺は人間として壊れてきている」。そう思ったときに、ジョージは爪楊枝みたいなものを使って食事

をして、ナイフを作ってパンを食べるというように、人間らしさをなんとか取り戻したいと考えたそうです。

そういうジョージさんが「憎しみは何も生まない」と子どもたちに語ってくれます。ジョージさんは今年の2月9日に85歳の誕生日を迎えましたが、その85歳の誕生日にドイツ政府から勲章が贈られました。私たちの国が犯したこれだけの罪をあなたは希望に変えてくれた。これだけの悲しみを生み出してしまったのは悲劇だけれども、あなたは希望に変えてくれた。憎しみは何も生まないと子どもたちに語り続けてくれた、これまでのジョージさんの教育活動に対してメダルが贈られたということです。

アウシュヴィッツでの日々を送りながら、1945年1月、このころはナチスの敗戦も迫っていましたが、東からソ連軍が近づいてきて、アウシュヴィッツも解放されるという日が近づいていました。この最後の最後の瞬間、ナチスはアウシュヴィッツでなんとか生き延びていたユダヤ人たちをまとめてドイツ本国まで徒歩で行進させて連れ戻そうとします。これが「死の行進」と呼ばれて、凍え死ぬような寒さの中、徒歩で1週間以上歩かされる。この途中で多くの命が失われたそうですが、ジョージもこの死の行進に加えられます。2日目、行進の途中で倒れていく人たちはどんどん撃ち殺されて、このままでは命はないと思ったそうですが、2日目の晩、ある建物で捕らえられていたときに、ソ連軍の戦車が近づいてきて砲撃を始めて混乱状態になり、捕らえられていた建物の壁にも、砲撃で大きな穴が開いて、その瞬間、ジョージは仲間と、「今だ！」と逃げ出します。ところが、しましまの囚人服を着ているので目立ってしまいます。見つければまた連れ戻されてしまうかもしれない。森や林の中をはうように逃げて、逃げて、逃げて、漸く連合軍に合流します。合流する手前で1軒の民家にたどり着きます。爆撃の混乱でその住民たちはどこかに逃げてしまっ

て、家は空っぽだったので、その中に入って残っていた食料を食べたり服を着替えたりして、途中で連合軍に合流しました。1月に逃げ出して、2月、3月、4月、5月…4カ月以上、ヨーロッパを遠回りして逃げて、最後はなんとか故郷のチェコのまちにたどり着いたそうです。

なぜカナダに移住したかという点、チェコですばらくは学校に戻って勉強もしますが、チェコも共産党政権下に置かれて、もう二度と自由のない生活は嫌だということで、カナダにいる遠い親せき、祖父の弟という方を頼って手紙を書いたら、その方が身元引受人になってくれるということ

で、ジョージさんはカナダに移住しました。ところが、その親せきの方が86歳で高齢だったので、カナダにたどり着いた日の翌日には、就職活動をしてその次の日からアルバイトを始めた。結局は、配管工事専門の建設会社を自分で興します。収容所に捕らえられていたときに、テレジン収容所では配管工の見習いとして働かされていたので、その技術を生かしたということです。現在は、その会社も息子さんが引き継いでいらっしゃる。チェコにも今では年に2回ぐらい里帰りをしています。

以上

